

観測実施件数の変遷

観測テーマと用いられる観測装置は時代とともに変遷している。下図（図1-30参照）は観測所開所以来の188cm反射望遠鏡で行われた観測の焦点別の使用頻度である。

まず全体的な実施件数の推移を見ると、1960年から70年代にかけては漸増しながら年間約60件程度、すなわち一件あたり5夜程度で割り付けられていた。しかし、80年代に入ると80件程度まで増加し、観測日数が減少したため、いわゆる「共倒れ」現象

が生じた。そこで、改組（1988）を契機としてスクリーニング制を導入して割付を整理し、日程を確保したが、このような推移が顕著に見られる。

また、焦点別の推移で特徴的なことは

- (1) 初期の頃はクーデ焦点が多用された、
 - (2) 80年代以降はニュートン焦点が減少した、
- ということが見られる。

これは、初期は恒星の分光観測、すなわち明るい星の大気構造や化学組成の研究が主であったが、次第に銀河や微光天体に対象が移ったこと、また、空が明るくなり、撮像観測が減少したこと等の結果と解釈できる。

80年代の途中で行われた写真からCCDへの検出器の交代の影響はこの図からも読みとれる。例えば、ニュートン撮像はCCDにより感度が上がり補正がしやすくなったことが一時的に利用を増やした。また、カセグレン分光では

・+写真にCCDが取って替わり、空の明るさに反して、より微光の天体を狙う観測が増えた。他方では、クーデ分光ではCCDの小フォーマットがカバーする波長域の狭さとなり、天体や観測テーマに大きな影響を与えた。なお、これはHIDESによって解消されている。

近年では、観測装置の立ち上げやテストに、また観測所現地に勤務する研究者用に利用される「観測所時間」を設け（図1-31参照）機器開発や現地における研究支援体制の充実を図っている。

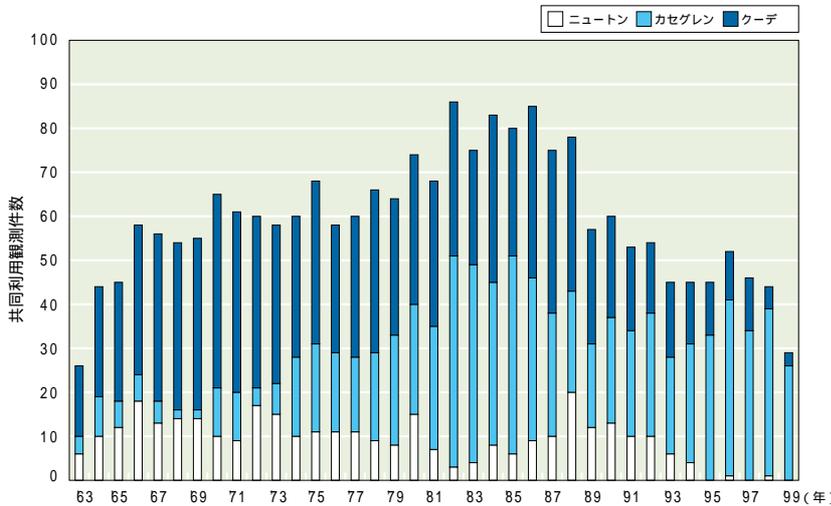


図1-30 焦点別共同利用観測件数の推移

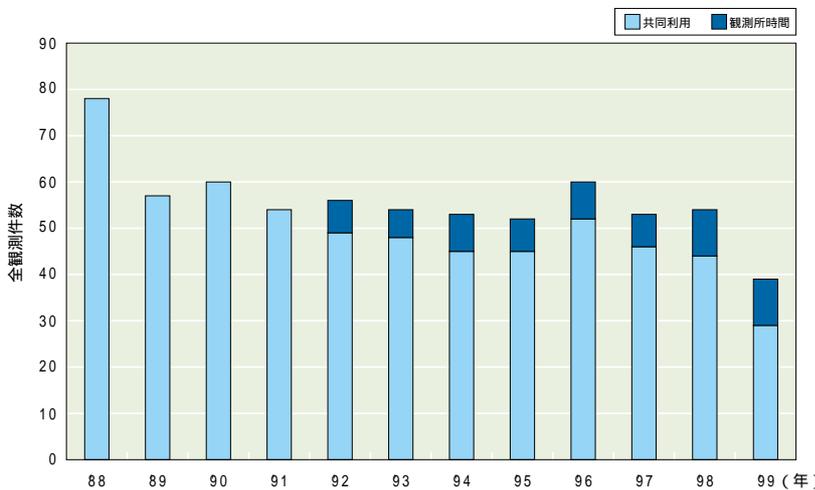


図1-31 観測所時間件数の増加